

聖書日課『からし種』 2026.6.7-6.14

6月7日 (日) 士師記 9章	「茨は木々に言った。『もしあなたが誠意のある者で/わたしに油を注いで王とするなら/来て、わたしの陰に身を寄せなさい』(15節)。木々がオリーブ、いちじく、ぶどうの木に断られた末に「わたしたちの王になってください」と頼んだ先の茨が与える約束は「保護」、求める約束は「誠意」。主を知らない世代(2:10)の混乱の中でも、心に留めなくなる「たとえ」。
8日 (月) 士師記 10章	「わたしたちは罪を犯しました。わたしたちに対して何事でも御目にかなうことを行ってください。ただ、今日わたしたちを救い出してください」(15節)。旧約聖書は自らを「選民」と信じ「聖戦」に突き進んだ民の迷走を告白している。新約を生きる私たちはどうだろう。ただ、「主の民」は、今日の救いを求めて叫ぶ先、罪の裁きをすべて委ねる相手を知らされている。
9日 (火) 士師記 11章	「エフタは主に誓いを立てて言った。『もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら』(30節)。この誓いの顛末は、彼の独り娘の死であった。「勇者」エフタ、出生の事情で家を追い出され、共同体の都合で強大なアンモン軍と戦わされることになった男が必死で主に勝利を願った誓いを、誰が責められよう。主がこの誓いを受けられたのかは謎。
10日 (水) 士師記 12章	「ギレアドはまた、エフライムへのヨルダンの渡し場を手中に収めた。エフライムを逃げ出した者が『渡らせてほしい』と言ってくると」(5節)。アンモン人を退けたイスラエルの部族同士の紛争。聖書での「渡し場」とは、川が局所的に浅く、歩いて渡れる場所。渡ろうと求めてきた人々は、敵とみなされれば殺される。主が作られた命の道が、人の手により死の道となる。

聖書日課 『からし種』 2026.6.7-6.14

11日 (木) 士師記 13章	「もし主がわたしたちを死なせようとお望みなら...今こうしたことをお告げにもならなかったはずです」(23節)。マノアの妻の主への信頼。彼女は非常に恐れながらも、御使いを通じて主がなさることを見、告げられることをきいていた。夫にそのままを伝えられるほどしっかりと体験する中で、「士師サムソンを産み育てる」という主からの召命を自覚したのだろう。
12日 (金) 士師記 14章	「(サムソンの)父母にはこれが主の御計画であり、主がペリシテ人に手がかりを求めておられることがわからなかった」(4節)。サムソンにしる彼が対峙するペリシテ人たちにしろ、今の私たちの倫理観や聖書解釈では理解不能な言動が横行する士師記の時代。そんな中でも「主の御計画」は進んできた聖書は語る。混迷を深める今の私たちの時代もきっと。
13日 (土) 士師記 15章	「神はレヒ(地名)のくぼんだ地を裂き、そこから水が湧き出るようにされた。彼はその水を飲んで元気を取り戻し、生き返った」(19節)。「彼」サムソンは多数の敵を打ちのめしたが、数々の騒動を起こして同胞にも疎んじられ、独りで岩の裂け目に住んだ。腕力はあっても、咽喉の渇きに死にそうになるサムソンを、神だけが憐れんで水を与えてくださる切なさ。
14日 (日) 士師記 16章	「彼(サムソン)の兄弟たち、家族の者たちが皆、下って来て、彼を引き取り…父マノアの墓に運び、そこに葬った」(31節)。サムソンの数々の奇行に、先に亡くなった両親はどれほど心痛めて神の前に祈ったことだろうかと想像する。最期になって自分に与えられた使命と真剣に向かい合ったサムソン。死においてようやく彼は愛する父のもとに帰ったのだった。